

熊田十兵衛の仇討ち

池波正太郎

熊田十兵衛の 仇討ち

池波正太郎

双葉社

熊田十兵衛の仇討ち

著者 池波正太郎

発行者 井上功夫

発行所 株式会社双葉社

東京都新宿区東五軒町三二八 千一六二

電話 (〇三) 五二六一―四八一八 (営業)

(〇三) 五二六一―四八三三 (編集)

振替 〇〇一八〇―六一―一七二九九

印刷所 株式会社亨有堂印刷所

製本所 株式会社若林製本工場

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

目次	
熊五郎の顔	5
あばた又十郎	39
喧嘩あんま	77
おしろい猫	109
顔	145
鬼火	179
首	213
寝返り寅松	247
舞台うらの男	279
熊田十兵衛の仇討ち	311
仇討ち狂い	341
解説 八尋舜右	367

装画／中一
幀／倉橋三郎

熊田十兵衛の仇討ち

熊五郎の顔

怪盜雲霧仁左衛門の乾分の中でも四天王とかよばれた山猫三次が、潜伏中の越後で捕らえられたのは、享保十六年（西暦一七三一年）晩秋のことであった。

三次と一緒にいた同じ四天王のひとりで州走の熊五郎という曲者は、捕手の包囲を斬り破って逃げた。

このときすでに額をうち割られ、捕手に押えつけられていた山猫三次へ、熊五郎は逃げながら声をかけていったという。

「山猫のおめえの躰は、きっと、この熊五郎が奪いかえしてみせるぜ」

こういうわけで、越後から江戸へ送られる山猫三次には二十人もの護衛がつき、警戒は厳重をきわめた。

それというのも、一昨年の春に一味の木鼠吉五郎を東海道筋で捕え、これを江戸へ護送する途中で、まんまと奪いかえされたことがあったからだ。

そのとき、六人の仲間をひきいて木鼠を奪い取った男こそ、ほかならぬ州走の熊五郎だったのである。

きびしく縄をかけた山猫三次を唐丸籠に押しこめ、護送の一行は、早くも雪がおりた越後の山々の下を、ただならぬ緊張をふくんで江戸へ進んだ。

一行に先がけて騎馬の役人が、三国街道から中仙道の宿場宿場へこの知らせをもたらしつつ、江戸

へ飛んだ。

江戸からは「火付盗賊改方」(一種の特別警察)向井兵庫の命によって、与力の山田藤兵衛が、組下の同心・手先など十五人の部下をひきい、護送の一行を途中まで出迎えるべく江戸を出発した。

二

「……そういうわけだな。向井様のおいっけで、おれが出張^でって来たというわけなのだ。山猫三次というやつは、雲霧一味のうちでも意気地のないやつらしい。越後でお縄になったとき、親分の雲霧はじめ仲間の者の人相なども、いくらか白状をしたということだ。これで江戸へ連れて行き、思いきり責めつければ、きっと一味の所在をも吐きだすに違いない」

江戸から十六里余りの道を、武州熊谷^{くまがや}と深谷^{ふかや}の間にある新堀^{にいほり}の宿までやって来た山田藤兵衛が、お延^{のぶ}の茶店へ立ちよって、そういった。

「まあ、さようでございますか」

お延の、浅黒い顔の肌に血がのぼった。

「山田さま。そうなれば、州走の熊五郎も……」

背も低いし、かぼそくも見えるお延の体が昂奮にふるえている。

「安心しろ。きっと、お前の亭主の仇はとってやる。それも近いうちだと思っておれ」

「は、はい」

茶屋の外に控えている同心・手先たちにも、茶をくばりながら、お延は、ふっと、その人数の中に、

死んだ夫の政蔵がまじっているような気がした。

かつては政蔵も、山田藤兵衛の下について目明しめあかしをつとめていたのである。

雲霧仁左衛門は、江戸市中ばかりか関東一帯を荒しまわってきた大泥棒であった。

江戸には町奉行という警察組織があるのだが、江戸以外の土地でも自由に働ける機動性をもった「火付盗賊改方」が主体となり、雲霧一味の捕縛に血まなこになってきたこの六年間なのである。

四年前の夏、政蔵は州走熊五郎の潜伏場所を突きとめ、七人の捕手と深川・亀久町かめひさの船宿へ踏みこんだ。

だが、けだもののように暴れ狂う熊五郎の脇差どすに腹を刺され、政蔵は死んだ。しかも、捕手が迫る気配を知った熊五郎は、すばやく用意の頭巾ずきんをかぶって顔をかくすという心憎いしかたで、見事に包囲網を斬り抜け、逃走した。

「おのれ、おのれ!!」

ひと足違いで駆けつけて来た山田藤兵衛は、足を踏みならして口惜くやしがったものだ。

「その熊五郎を、こんども取り逃してしまった」

と、山田藤兵衛は舌うちをして、

「しかも州走のやつめ、山猫三次をこの道中で奪いかえすつもりらしいのだ」

「まあ、それは……」

藤兵衛からすべてをきき、お延の濃い眉まゆが怒りにつりあがった。

「そ、そんなことをさせてなるものか!!」

と、お延は思わず叫んだ。

「案ずるな、お延。そのために、われらが出張って来たのだ。これから急げば、おそらく明日中に、高崎と沼田のあたりで、江戸送りの一行と出会えよう。そうなれば、いかな州走でも手は出せまいよ」

山田藤兵衛は茶代のほかに、紙包みの金をおいて立ちあがった。

「あ、そのような……」

「よいわ。坊主^{ぼんず}に菓子でも買^かうてやれい」

「いつも、お心におかけ下さいまして……」

「当り前のことだ。政蔵の働きは尋常なものではなかったのだからな。今でもおれは……いや、おればかりか向井様も、お前たち母子のことは心におかけなされておられるぞ」

「もったいない。ありがとうございます」

「坊主は元氣か？」

「はい。おかげさまで……」

「それはよかった。たしか、今年で七つになったはずだなあ。政蔵も、お前がしっかりしているので、草葉の蔭から安^{やす}どしておることだろう」

お延は、このとき目を伏せた。なぜ目を伏せたか、それは山田藤兵衛の知るところではない。

「では、いずれまた、な」

「おかまいもいたしませんで……」

「いや、いや……」

外へ行きかけ、山田藤兵衛はちょっと考えてからお延のそばへもどって来た。

「万が一……万が一のことだが……」

「はい……?」

「このあたりへ州走めが立ちまわることがあるかもしれぬ、山猫を奪いかえそうとしてな」

「あ……」

「お前も、もとは御役おやくの者の女房だった女だ。しかも、いまは宿はずれの茶店の女あるじ。道行くものに注意しておってくれい」

「は、はい……」

「ここに、山猫三次が洩らした言葉によって書きまとめた州走の人相書がある。念のために渡しておくから、よく読んでおいてくれい。宿場の町役人にも渡してあるが……」

「はい」

部下を従え、深谷の方向へ速足で走る山田藤兵衛を見送ったお延は、そそくさと店の中へ駆けもどり、亡夫を殺した憎いやつの人相書を読んだ。

読むうちに、お延の顔色がみるみる変ってきた。

州走熊五郎の人相書には、こうしてある。

無宿州走熊五郎

一、丈五尺三寸たけほど。

一、歳三十歳ほどに見ゆ。

一、小肥りにて色白く齒並び尋常にて眼の中細く。

一、尚左耳朶なほみみたぶに一カ所、左胸乳首の上に一カ所、小豆大あずきだいのほくろ罷まかりあり在候。

その一つ一つが、みんな覚えのあるものであった。

ことに、最後の一条がお延に強烈な衝撃をあたえた。

(あのひとの左の耳たぶにも、たしかにほくろが……)

自分をだいた男の腕が、亡夫の政藏を刺した同じ腕だとしたら……。

(ああ、どうしよう……)

蒼白となって、お延が店の土間によろよと立ったとき、

「おっ母あ、腹がすいたよう」

五町ほど先の新堀の宿で友達と遊んでいたらしい息子の由松が、表からとびこんで来た。

街道にも、その向うにひろがる枯れた田畑の上にも、冷ややかな夕焼けの色が落ちかかっていた。

三

その男が、お延の茶店へあらわれたのは五日前のことだ。

その日は明け方から強い雨がふり出し、終日やむことがなかった。

道中の人も絶えたようであった。昼すぎになるまでに、急ぎの旅人を送った帰りの駕籠かこかきが二組ほど店へ入って来、酒とうどんで駄をあたためて行っただけである。

子供の由松も、前日から一里ほどはなれた市ノ坪で百姓をしているお延の実家へ遊びに行き、二日

ほど泊って来ることになっていた。

実家には兄夫婦と子供が四人いる。

（お客も、もう来やしない。店をしめてしまおうかしら……？）

暗い雨空に時刻もよくわからなかったが、そろそろ夕方にもなるだろうと思い、お延が店の戸をしめようとしたときであった。

深谷の方向から来たらしい旅人が、よろよろと店先へ入って来たのである。

「す、すみませんが、ちょっと……ちょっと休ませてもらえませんかね」

「さあさあ、どうぞこちらへ……」

男は、もどかしそうに背中の荷物を放り出し、笠と雨合羽あまがっぱをぬぎ捨てると、そのまま、苦しげに小肥りの躰を土間の縁台の上に折って、低くうめいた。

「どうかなさいましたか？」

「すみませんが、白湯さゆをひとつ……」

「はい、はい」

湯を持って行くと、男は、それでも人なつこそうな微笑をうかべて頭を下げたが、すぐにふところから丸薬を取り出した。

「どこか、工合でも……？」

「へえ。こんなことは、めったにないのですが……今朝から腹が、ひどく痛みましてね……」

男は旅の陽に灼やけてはいたが、小ざっぱりとした風体ふうたいで、口のきき方にも誠実そうな人柄がうかがわれた。

薬をのみ、縁台で横たわっているうちに、男の蒼い顔はべっとりと脂汗あぶらあせに濡れ、うめきと喘あえぎが
只ならない様子になってきた。

「これじゃあしようがありませんねえ。ま、奥へお上りなさい。私、お医者を……」

「そ、そんな、御迷惑をおかけしては……」

「と、いって、このままじゃあ却かえって迷惑しますもの」

お延の気質としては捨てておけなかった。

旅の男を奥の部屋に寝かせ、戸締りをしてから、お延は新堀の宿へ走って、医者を呼んで来た。

「まあ、大したことはないならぬと思うが、今日は動かせないよ。ここへ泊めてやったらどうだな？
というても、女ひとりの住居だから、それも、どうかな……」

「いえ、そうなれば、私は市ノ坪の実家へ泊りに行きますから」

「あ、そうだったな。では、わしは、これで」

医者が帰った後も、男は苦しうであつた。

雨はつよくなるばかりである。

市ノ坪へ行くつもりでいたお延も、日が暮れてはくるし、雨もひどいしで、もう面倒になり、

（こんな病人といたところで、別に……）

この近辺でも、かたいのが評判でとおっている寡婦のお延であつた。

夜になった。

お延も腰を落ちつけることにきめ、男の看病をしてやることにした。

発熱に喘あえぎながら、とぎれとぎれに男が語るところによると……。

男は信太郎のぶたろうという名で、旅商人だという。もともと上方かみかた育ちで、古着を商あきなっているのだが、京・大坂からの新品も扱い、これを北国ほくごくや信濃しなのにある得意の客にとどけることもする。旅商人としては上等の部類に入るといってよい。

「諸方の御城下の武家方にも、出入りをさせて頂いております」と、信太郎は語った。

「まあ、そうですね。でも……」

とお延はくすくす笑った。

「どうかなすったので？」

「いえね。あなたと私の名が同じなものですから、ちよいと可笑おかしくなって……」

「へえ、さようで……」

「私、お延っています」

「お延さん……さようで……」

まもなく、男は、ぐっすりと眠った。

お延が、男の左の耳みみのほくろに気づいたのはこのときであった。（まあ、あんなに大きなほくろが……）

翌朝になると、信太郎は元氣を取りもどした。

（もともと躰はしっかりしておりましたのでね）

そうはいっても、まだ熱もいくらかあるし、食欲もない様子なので、お延は、もう一日、信太郎を泊めてやることにした。